

Rapport

APRIL 2013 NUMBER

20

大学で、何を学ぶのか

青森県立保健大学 社会福祉学科 教授 大和田 猛

新入生へのメッセージ 2013

清水端 朱音 杉本 彩 奥山 千尋 工藤 紗希

ラポール 20 号記念 特別企画

20歳の頃、どんな本を読んでいたか

吉池 信男	葛西 紗幸	福島 真人	千葉たか子
岡嶋 雅昭	佐々木侑子	木村ちひろ	赤石 知香
熊谷和香子	丹羽 美貴	Y・Y	山田 奈々

シリーズ 図書館を使いこなそう
第 20 回 図書館のココが変わった！

『ラポール』は、人間同士（学生&教職員&地域住民&県民）のつながりを意味します
Rapport：フランス語で、関係・関連・類似点

大学で、何を学ぶのか

青森県立保健大学 社会福祉学科
教授 大和田 猛



新入生の皆さん、入学おめでとうございます。
青森県立保健大学健康科学部に入学し、期待と緊張感を抱えながら望んだ入学式はいかがでしたか。

これから、看護学科、理学療法学科、社会福祉学科、栄養学科と、それぞれの専門の道を目指して、たくさんの学びや経験を積み重ねていくことと思います。

本学は、それぞれ対人援助を基本にした実学を学ぶ学科で構成されている大学です。それぞれ、患者さんや、利用者さんから信頼される質の高い専門職を目指して、講義や演習、実習などの多岐に渡る知識や技術、職業倫理などを身につけていくことが求められています。もちろん、勉強だけではなく、サークル活動、アルバイト、ボランティアなど様々な体験を積み重ねることも幅広い視野を持つ専門職としては大切なことです。

実践の主体性

高校と違って、大学は主体的に自ら学ぶ態度と姿勢、行動力が必要になってきます。

本学のパンフレットなどを見ると、本学の特色として、①保健医療福祉専門職としての専門的態度、②将来に向けた「連携・協調」力を持った専門職の養成、③人間としてのチカラを育む主体的に生きていく教養人というヒューマン・ケアのプロフェッションのために、カリキュラムが構成され、教育環境の整備を進めながら教員集団が一体となってみなさんに向き合うことが分かります。

したがって、みなさんには、ヒューマン・ケアのプロフェッションとして、保健医療福祉専門職としての主体的態度が強く求められます。つまり、利用者のニーズを把握したり、問題解決に取り組む主体性、保健医療福祉の連携・協力ができる主体性、新しい専門知識や技術を習得する主体性、これらのことを実際に患者さんや、利用者さんに向き合ったとき、実践できる主体性、が必要になってきます。

これらのことが実践されたとき、初めて保健医療福祉の専門職として社会に貢献できる、ということになります。

図書館を活用する力

これらの主体性や実践力を培うための大きなツールが図書館です。大学では講義を漠然と受講するだけではなく、自分たちで考える、調べる、そしてまとめる、発表する等の場面が多々出てきます。また、演習などでは実際に実践力を養うために、様々な文献を検索したり、資料を探したり、先輩の意見を尋ねたり、仲間同士で検索したりすることも重要になってきます。そのとき、本学の図書館は、保健医療福祉に関する膨大な文献が用意されており、みなさんの学習環境をバックアップする大きな力となっています。積極的に主体的に、図書館を活用して、大学生として知識や人格、技術、価値観などを磨いてください。

専門性を高めるために

本学の学部学科構成は座学ではなく、実践の学で構成されています。実践の学と言うのは大学で学んだ様々な知識、技術、倫理などを実際に患者さんや利用者さんにやれる、出来る、こと。保健医療福祉の専門異職種の人達の役割や立場を考えたり、尊重したりしながら、具体的に協力・連携出来ることなどを意味しています。したがって、頭の中だけで事柄を考えるのではなく、現実的に実際の臨床場面でやれる、出来る力量が備わっていないければなりません。

大学では、そのような意味で教育だけではなく、研究の基礎となるスキルを身に付けることも求められます。すなわち、読む、聞く、考える、批判する、書く、話す、議論する、発表するなどの力量です。このことは一冊の教科書では身につくことが困難だと思います。

このために、図書館にある多くの文献や資料を検索し、解読することが何よりも大きな力になるはずですが、保健医療福祉の専門職は、社会に出てからも、絶えず先行研究の文献や資料を検索したり、分析したり、発表したり、関係専門職相互で議論をしたりすることが多いと思われます。特に、様々な保健医療福祉の制度や制度の内容などは目まぐるしく変化したり、改正されたりしています。時代状況に即応した質の高い専門職を目指して、これから講義や演習、実習等を通して専門性を磨いていくためには、図書館の活用が不可欠なこととなります。

患者さんや利用者さんに信頼される専門職を目指して、さあ、図書館に出掛けましょう。





新入生へのメッセージ 2013

図書館にいきましょう



社会福祉学科 2年

清水端 朱音

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新しい環境の中、不安や期待でいっぱいだと思います。大学生活は授業やテスト、アルバイトなど大変なこともあります。たくさんの仲間と出会えるサークル、ながーい夏休みと春休みなど、楽しいこともたくさんあります。そこでみなさんに、大学生活を満喫していただくためにも、図書館の利用方法を紹介したいと思います。

大学生活を有意義なものにするためには、遊びも大切ですが勉強も欠かせません。私は、レポートなどの課題や試験勉強をするために図書館を利用しています。大学では、レポート課題が多く出されます。そのようなときは、図書館へ行き専門書を参考にしながらレポートを作成します。図書館内のコンピュータで蔵書検索ができるので、本を探すときには使ってみてください。

また、テスト勉強がなかなか進まないときには、友達と一緒に図書館で勉強しています。保健大学の図書館には、様々なタイプの机があります。友達数人と一緒に勉強したいときには大人数用の机を使い、一人で集中して勉強したいときには個人用の机を使います。図書館内は静かで、他の学生も真剣に勉強しているので、とても集中できますよ。しかしテスト前の図書館では、たくさんの学生が勉強しているので、席が無いことがよくあります。

保健大学の図書館には、いくつかのルールがあります。図書館を利用するときには、ルールをしっかりと守って、誰もが快適に過ごせるようにしましょう。

皆さんが充実した大学生活を送れるよう応援しています。遊びも勉強もたくさんして、楽しい大学生活を送りましょう。



図書館の 利用方法について

看護学科 2年 杉本 彩

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。これから始まる新しい生活に夢を膨らませていることと思います。大学での勉強は自分から自主的に学ぶ事が多くなります。そこで、図書館の存在がこの大学生活の4年間で重要になってきます。

図書館の利用方法は沢山あります。私の主な図書館の利用法は、勉強するための場として活用することです。大学では様々な課題が出ます。例えば、レポート・グループワーク・調べ物などがあります。その用途に分けて、図書館では様々な部屋や机を利用できます！

私は友達と話しながら課題をしたい時はグループワーク室を利用し、レポートを書きたい時は一人部屋を使い、普段の調べ物や勉強は4人席の場所を使います。勉強する席は1年間で色々な場所を試して、今ではお気に入りの場所もありますよー！皆さんも、これからの大学生活で、お気に入りの場所を見つけてくださいね！ちなみに、テスト期間は皆が図書館で勉強するので、席の取り合いで大戦争ですよ。

看護学科の学生は、基礎看護実習の予習ビデオをグループワーク室を使って見たり、個人スペースで見ることが出来るのでオススメです。図書館には、パソコンも借りることができて、レポートを書くことができたり、調べ物も出来るので、学校にパソコンを持ってこなくても大丈夫です！

あと、図書館ではおススメの本を自分で選んで図書館のおすすめスペースに置くことが出来る **BOOK HUNTING** というシステムがあるので、欲しい本がある方は参加してください。時期が来たらお知らせが図書館に張り出されますので、ぜひチェックしてくださいね！

最後に保健大の図書館の貸出期間は2週間で、長期休暇期間は長く借りることができたり、パソコンで予約者がいない場合、更に2週間貸出延長可能でとても便利ですので、ぜひこの大学4年間の生活で沢山利用してくださいね！皆さんにとって大学4年間の生活が充実したものとなるよう祈っています。頑張ってください！



新入生のみなさん、保健大学へのご入学おめでとうございます。これから始まる大学生活について、期待や不安など様々な思いを抱えていることでしょう。サークルやアルバイト、授業など大変なことも多くありますが、楽しい大学生活を送ることが出来るはずです。しかし、時間はとても速く過ぎていきます。その中で、充実した大学生活を送るための方法として、図書館の活用法について紹介したいと思います。

私は、3つの目的で図書館を多く利用します。1つ目は、レポート作成や課題提出のためです。大学ではレポートや各授業での課題の提出が多くあります。そのため、様々な文献・資料が必要になってきます。そこで、沢山の専門書の揃っている図書館を利用します。日常の授業終了後にも、授業で気になったことについて調べ、理解を深めるために利用することも可能です。本を探すときは、館内の検索コーナーにあるコンピューターで、蔵書検索を使用すると、時間をかけずに利用できます。

2つ目は、読書のためです。図書館には沢山の種類の書籍があるので、普通に読書を楽しむ

ために利用するのはもちろん、自分の学科関連の本や、興味のある本を読むために利用します。私は、様々な本を読むことで、多くの知識を身に付けられたとともに、幅広い視野で物事をとらえられるようになりました。そのため、新入生のみなさんにも多くの本を読むことをおすすめします。

3つ目は、試験勉強のためです。館内はとても静かですし、みんな集中しているので良い刺激になり、更に頑張ろうという気になることが出来ます。図書館には、個人用の机、大きな机、個室などがあり、自分に合った用途で利用できます。試験前になると、席が埋まってしまう程、多くの方が利用しています。新入生のみなさんも、是非、利用してみてください。

図書館には、利用上のルールがいくつかあります。多くの方が一緒に使用する公共の場なので、ルールを守り、気持ちよく利用できるようにしましょう。空き時間を使い、図書館を多く利用して、充実した大学生活を送れるようにしましょう。



図書館を活用しよう！

栄養学科 4年

工藤 紗希

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。大学生になり、わくわくドキドキ、期待と不安でいっぱいだと思います。初めての経験がたくさん待っています。例えば、実践的な勉強、部活とはまた違うサークル活動、誰かのためそして自分のためのボランティア活動、自分でお金を稼ぐアルバイトなど様々あります。新しいことに挑戦して、たくさんの人と出会い、友達をつくって、新しい自分に出会い、充実した大学生活を送られるよう、心から願っています。

保健大の図書館には看護、理学、社会福祉、栄養に関する本が揃っていて、課題で分からないことや、自分の興味がある分野について詳し

く調べることができます。図書館には、授業で使われている教科書も置いてあり、「あっ、教科書忘れた！どうしよう」という時も借りることができるので便利です。

大きい机や1人用の机、パソコン、グループ学習室、1人用の個室もあります。友達と一緒に励まし合いながら勉強したり、一人で集中して勉強できるすばらしい空間です。用途に応じて様々な使い方ができます。テスト勉強をしたり、パソコンでレポートをしたり、授業の空き時間に課題をしたり、好きな本を読んだりするのもよいと思います。

また、保健大ではブックハンティングという、「図書館にあったらいいな」と思う本を、書店で学生が直接選ぶ企画があります。この企画は誰でも参加できます。みんなに読んでほしいと思うお勧めの本を選んだり、前から欲しかったけれど高く買えなかった本を選んだりすることができます。是非みなさんも参加してみてください。

最後に、図書館にはいくつかのルールがあります。ルールを守りみんなが快適に過ごせる空間にしましょう。みなさんも自分にあった図書館の使い方を見つけ、大学生活をより有意義なものにしてください。



ラポール20号記念特別企画

20歳の頃、

どんな本を読んでいたか

ラポールが記念すべき20号を迎えました。

「20」にちなんだ特別企画として、“人生の先輩”たちが20歳の頃に読んでいた本を紹介します。



昔の大学生はヒマだったのだろうか。ぼくはちょっとした休み（週末でも）があれば、「旅」に出ていた。学校の勉強でいえば社会科、特に「地理」が好きで、ずいぶん小さな頃から地図や時刻表を眺めていた。そんなぼくに“火をつけた”のは、「何でも見てやろう」という1冊の本だった。読んだのは、高校3年生の受験勉強の合間だったと思う。

書評では無いので、中身については紹介しない（興味があったら読んでみて）。小田実という著者のことも、みんなほとんど知らないだろう（昔の若者はよく知っていたと思う）。とり

あえずは、チョー“濃い”人による、相当モーレツな旅の日記と思ってもらえばいいかな。その旅はずいぶん古い時代のことで、ぼくが生まれる前の1960年ごろの話。20年後にそれを読んでもとって新鮮で（50年後の今、君たちが読んでもそうだと思う）、特にぼくはハッとしてグッとなってしまった。同じように、沢木耕太郎（この人の作品は読んだ人もいよね）は、この本の影響を受けて26歳の時に香港から لندن までの旅に出た。その時の話が「深夜特急」という全6巻のベストセラー。

一方、吉池信男は、大学2年生（まさに20歳頃）の春休みに、アルバイトと奨学金？で貯めたお金で、南回り（この意味わかるかなあ？）のヒコーキに乗って、初めての海外旅行（というよりもヒコーキが初めて）に飛び立った。まあ、どうでもいいことだけど、ロンドン（“旅のはじめ”に大英博物館は外せない）→アムステルダム→ケルン（ここまでは普通っぽい）→西ベルリン→【恐ろしいベルリンの壁；国境越えは地下通路から】→東ベルリン→グダニスク→クラコフ→ワルシャワ→プラハ→ウィーン

→ケセグ (Kőszeg) →ブダペスト→ベオグラード→イスタンブール→カッパドキア→エフェス→イスタンブール→フィレンツェ→ローマというルート。今でこそ、ヨーロッパは「ユーロ」なんて友好ムードだけど、冷戦下で「西」と「東」が分断されていて、共産主義諸国の国境（鉄砲をもった兵隊がものものしく並んでいる）を真夜中に越え、まだ雪の残る東ヨーロッパを旅した。そういえば、アウシュビッツにも行ったけれども、これは「夜と霧」(V・E・フランクル)の影響だった。移動の半分以上は夜行列車や夜行バス（つまり「深夜特急」の世界）で、トルコでは4晩連続夜行バスなんて、若いからできたことと今さらながら感心している。

沢木耕太郎みたいに自分の旅の形を本にできなかったのも、そのころのぼくと同じ年齢の君たちに伝えておこうと、恥ずかしながら、どうでもいいことをあれこれと書いてしまった。

春はもうすぐ。お気に入りの本を鞆にいれて、旅に出よう！

※同じ頃読んだ“庄司薫くん”っぽい文体としました。



写真は、次の旅（ミャンマー）でとったもの



『何でも見てやろう』
小田実
講談社文庫
講談社
290.9||O17



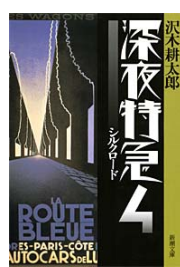
『深夜特急1
香港・マカオ』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||1



『深夜特急2
マレー半島・シンガポール』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||2



『深夜特急3
インド・ネパール』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||3



『深夜特急4
シルクロード』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||4



『深夜特急5
トルコ・ギリシャ・地中海』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||5



『深夜特急6
南ヨーロッパ・ロンドン』
沢木耕太郎
新潮文庫
新潮社
915.6||Sa94||6



『夜と霧』
ヴィクトール・E・フランクル著
池田香代子訳
みすず書房
946||F44



『赤頭巾ちゃん気をつけて』
庄司薫
新潮文庫
新潮社
913.6||Sh96



20 歳のときに 読みたかった本

看護学科 助手 葛西 紗幸

今日は、20 歳のころに読んでいた愛読本ということでお願いされたのですが、記憶がかなり前で思い出せなかったのですが、自分がこのころに読んでいたら、影響を受けていたのではないかなと思える本を紹介したいと思います。

池川明先生が出している、胎内記憶についての絵本です。絵本なので、簡単に読めます。前にも紹介したことがあるのですが、1 冊ではなく数種類出ていますので、興味のある方はぜひ読んでいただきたいと思います。

赤ちゃんは自分の親を選んで生まれてきます。お母さんを選んだ理由や生まれてきたときの記憶などを沢山の園児から聞き取り、その内容を絵本にしています。

「パパとママを選んだんだよ。ずっと待ってたんだよ。」

「(なぜお母さんをえらんだの?)いい顔してた

から。かわいかったから。」

2 歳～3 歳くらいの子が語った内容です。

助産師として、働き何年かしてから出会った本です。赤ちゃんもお母さんを選んで生まれてきている、赤ちゃんの生きるたくましさなどに本当に感動しました。日々、分娩に立ち会うたびに、その本の事を思い出し、目の前の家族のお産を大切にしたいなと思いつつながらその場に立ちあわせていただけていました。

看護や医療系の職業を選んだ皆さんは、人が好きで、優しい人が多いと思います。臨床に出ても常に人の気持ちになって、相手に接することを忘れないでください。そのためにたくさんの方がいて色々な考え方があることも理解しておかなければいけません。大学では、そういう感性や相手の立場になって考えられる力もたくさん時間をかけて学んでほしいと思います。沢山のの人に触れ合って、沢山の考え方があって、その中でどうやったらみんなが心地よく生きていけるのかを学んでいってほしいなと思います。勉強はもちろん大切ですが、臨床に出してしまうとなかなか本を読んだり、沢山の人と会うという機会が少なくなってしまうので、大学在学中に教科書以外の本を読んだり、考えたり・・・毎日沢山の学びを持って生活してほしいなと思いました。



『ママのおなかを
えらんできたよ。』

池川明
リヨン社
376.11||I33



『おぼえている
よ。ママのおな
かにいたとき
のこと』

池川明
リヨン社
493.95||I33



『ママのおなかを
えらんだわけは
…。』

池川明
二見書房
376.11||I33

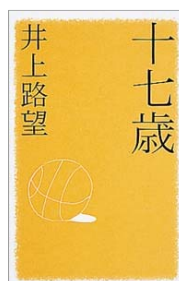
過去の自分を振り返って

理学療法学科 助教

福島 真人



20 歳の頃に読んでいた本の紹介というテーマを頂き、急いで家にある本を調べてみたものの一向に当時の本が見つからず、出てくるのは学生時代使用していた教科書と就職してから買って読んだ本ばかりでした。今でこそ多少、雑誌やマンガ本以外の本を見ることも多くなりましたが、20 歳の頃はほとんど本を読む習慣がありませんでした。それでも出版年を確認しながら探していると、1つだけ当時のものと思われる本が出てきました。「十七歳」という本です。本の帯も残っていて、そこには“「学校って、何ですか。」アポイントもなしで、突然出版社に原稿を持ち込んだ現役女子高生、井上路望が伝える衝撃の真実。”と書かれてありました。当時、なぜこの本を選んだかはまったく覚えていません。内容もほとんど忘れていたので、20 歳の頃に 17 歳？、と思いながらも改めて読んでみました。そこには、学校や家庭でのことなどを中心に、子どもと大人の間を揺れ動きながら葛藤する著者の気持ちがストレートに書かれていました。今でいう、ブログのような感覚で読むことができると思います。10 年以上前の話になりますが、つい数年前まで高校生だった学生のみなさんは共感する部分も多いのではないのでしょうか。



『十七歳』
井上路望
私の生き方文庫
ポプラ社
367.68||157

本を読むことによって、いろいろな知識や情報が得られるのはもちろんですが、考え方の幅も広がります。同じことに対して、自分と同じように考えている人もいればそうでない人もいます。自分にはなかった、新しい考えもあることに気づきます。ろくに本を読んでこなかった自分が偉そうに言える立場ではないですが、過去の自分への反省も含め、学生のみなさんには是非今のうちからいろんなジャンルの本を読むことをお勧めします。



『氷点』上
三浦綾子
角川文庫
角川書店
913.6||Mi67||1



『氷点』下
三浦綾子
角川文庫
角川書店
913.6||Mi67||2

己に問い続ける

社会福祉学科 准教授
千葉 たか子

陽子は、どのような理不尽な扱いを受けてもどのような冷たい仕打ちをされても、恨むことなく、明るく笑顔で生きようと努めた。自分の心さえ、一点の曇りもなく清浄であれば、下を向くことはない。そう信じていた。しかし、その自分の最も大切な心が、凍ることを知った。純粋なままの自分の心、それは己の生を断つことでしか守れないのか。この問いは、心に沁み着いた。

冷涼で乾いた空気。凍てつく北の大地は、若者を魅了する。私が、北海道大学へ進学を決めるのに、多くの理由は要らなかった。そこで、出会ったのがこの本である。北海道の冬は寒い。そのピーンと張りつめた空気の緊張が、全編に漲っている。求道者には、極限の寒さと緊張が似合う。

入学し、理系の多くの学生のようにドイツ語を選択履修した。『氷点』にちりばめられたドイツ語が、鮮やかに目に入ってくる。しかし、学生運動の渦中にあった大学は、個人が淡い口



マンチシズムに浸る事を許さなかった。徹夜の議論が続く。疲労はいやがうえにも蓄積する。その議論の中で、問われたのは、「お前は、何か」であった。あくまでも、自己を追いつめる作業である。学生運動の中で、友は逝った。人は、「彼女は、あまりにも純粋すぎた」という。心の純粋さを守るには、やはり究極の選択しかないのか。

この本と、続く『続・氷点』は、原罪とゆるしがモチーフであるとされる。しかし、私は、一人の人間が己の心と唯一絶対を対峙させた軌跡と読んだ。『氷点』の最後は、メロドラマになってしまったが、自分に対して誠実であろうとすること、純粋であろうとすること、若い時代の未熟な議論は、今も私の中で続いている。



今からちょうど二十五年前、私が前の職場に入りちょうど五年が経過した時期に、私はこの本に出会いました。当時の私は大学の事務職員として就職担当という立場、簡単に言えば学生の就職をサポートする業務に携わっていた頃のことです。日々の業務に終われる毎日を過ごしていて、このままこの仕事を続けていいのかと自問自答することがしばしばでした。何故そのような気持ちになっていたのかと言いますと、私は中学校か高等学校の教員になりたいと切望していたのですが、現実には教員ではなく大学の事務職員という違いに、社会人となり五年が経過してもなお、自分の中で納得がいかず、このままでいいのかと自分に問い続けていた



『燃えてみないか、今を！: サッカーに教えられた熱き人生』
松本育夫
ぱるす出版
783.47||Ma81

のかもしれません。そんな時に就職講演というイベントで講師としてお招きしたのが、この本の著者である松本育夫さんでした。彼の著書「燃えてみないか、今を！」を学生と言う立場ではなく、社会人としての立場で触れてみた時、今までの自分は一体何だったのかと反省するきっかけを私に与えてくれたのです。この本には、今自分が置かれている状況下で、精一杯頑張ることの重要性を説いていました。自分がたとえ望まない形で今の状況に置かれたとしても、それは自分自身が運んできた運命であり、その運命の下で燃えてみるのが大切であると説いていたのです。今の仕事に就いたのも運命であり、その運命の下でどれだけ頑張ってきたといえるだろうか、まだ頑張れたはずなのという思いが込み上げてきたのを覚えています。二十五年前にこの本に出会っていなければ、今の私はなかったのかもしれません。たった一冊の本との出会いがその後の人生観を変えてしまうほど大きな影響を与えることができるのだと実感した次第です。



読んだ人それぞれに 響く言葉が見つかる本です

事務局 地域連携推進課 佐々木 侑子

あまり本を読まない私が唯一、本を買ってまで読むというくらい好きな作家さんがいます。伊坂幸太郎という作家さんです。今回 20 歳の頃に読んだ本の紹介ということで、伊坂さんの「アヒルと鴨のコインロッカー」を紹介しようと思います。

主人公は大学入学を機に、関東から東北に引っ越してきた少年・椎名。越してきた早々、同じアパートに住む謎めいた青年・河崎と一緒に本屋を襲わないかと誘われます。しかも理由は広辞苑を盗むこと。気の弱い少年は結局河崎と本屋襲撃を実行してしまいます。なぜ本屋を襲撃したのか？それは 2 年前に遡って、河崎、琴美、琴美の彼氏・ドルジ（ブータン人）、ペットショップ店員の麗子たちが遭遇したペット惨殺事件を知ることにより、その理由が次第に明らかになっていきます。

軽快な会話にぷつと笑いつつも、とにかく先が気になって早く読まなきゃと半ば義務のように読みました。最後にきたどんでん返しに驚きと、もやっとしていた数々の疑問が解消した気持ちよさで読後はすっきりします。推理ものが好きな人にはたまらないでしょうが、他にも魅力はたくさんあります。それは伊坂さんによる名言が小説内にたくさん散りばめられてい

ることです。

「気が変わらないうちに行動しなさい。飽きたり、嫌になったり、怖くなったりする前に、思いついたことはすぐにやった方がいいよ。」

「どうせいつかはみんな死ぬんだし、ポジティブでないとやってられないよ。」

話を読み進めるうちに登場人物たちの言葉が、とても説得力のある言葉として心に響いてきます。良いこと言うなあと感動したり、そうだよなあ〜としみじみしたり。この本の他にも伊坂作品にはたくさんの名言がありますので、読み手それぞれに響く言葉が必ずあると思います。興味がある方は色々読んでみてはいかがでしょうか。

また、伊坂さんが仙台市在住ということで、小説の舞台として主に仙台が使われるのですが、映画化した際にもロケ地として仙台が登場します。「アヒルと〜」の映画にも仙台市の風景が多々映されていたのですが、なんと自分が通っていた大学のキャンパスや、よく通っていたこじんまりしたお惣菜屋さんがロケ地として使われていたのには驚きました。この映画を見るたびに懐かしい学生時代を思い出します。私にとってこの本は、昔の自分を思い出す手段であったり、元気のない時でも登場人物たちの言葉に励まされてちょっとがんばってみようかなと私の背を押してくれるような存在です。



『アヒルと鴨のコインロッカー』

伊坂幸太郎
創元推理文庫
東京創元社
913.6||168



20 歳の頃に読んでいた本を紹介するという
ことで、いろいろと読んだ本の中で今も手元に残
っている本のうち 1 冊を紹介します。

それは、太宰治の『津軽』という小説です。
太宰治という作家はあまりにも有名なので紹
介するまでもないと思いますが、青森県出身の
作家で今もなお多くの人たちに読まれ続けて
いる作家の 1 人です。

数年前には太宰の小説が映画化されるなど、そ
の賑わいを感じることができます。

では、なぜたくさんある作品の中から『津軽』
を読んだのか…。

これは好きで自分から本を手にとったわけ
ではなく、大学の講義で『津軽』を読んでレポ
ートを書いて提出するという課題があり、そのた
めに購入しました。

太宰作品の中でも『津軽』という小説は書店に
なかなか置いていなくて、いろんな書店を転々
とした記憶があります。

やっとの思いで手に入れた『津軽』を読み込む
にはかなりの根気が必要でした。

なぜならば私の中で「太宰治＝暗い」というイ
メージがくっついて離れなかったからです。

ちなみに本の内容は太宰自身が故郷である津
軽を旅するというものになっています。

読んでみて、太宰の目線から見た青森県、太宰
が想う青森県の姿、太宰が想っていた人々、
様々な太宰と青森県を知ることができました。

今思うと、「暗いから読みたくない」そういう
偏見を持っていたことが少し恥ずかしいくら
いに思えます。

太宰作品の中でも少しほっこりできる作品に
なっていると思いますので、是非手にとって読
んでみてください。

そして、ほっこりしたついでに太宰についても
っと知りたい!!と欲していたら、是非と
も足を運んでいただきたい場所があります。

それは青森県立図書館 2 階にある青森県近代文
学館です。

太宰の生涯を知ることができますし、貴重な資
料が展示されています。

少し日常生活から離れて文学の世界へと旅立
つのも良いかもしれません。

展示室の空間が、きっとあなたを独特な世界へ
と導いてくれます。

さて、太宰作品の中でも『走れメロス』『人間
失格』などと比べると有名な作品ではないかも
しれませんが、この『津軽』という作品は太宰
の違う一面を垣間見ることができます。

20 歳の頃の私と同様に「太宰の作品って暗いん
でしょ？」と思っている方、「太宰の作品は
好きなんですけどこの作品は知らなかったな」と
いう方、「太宰？ピースの又〇さんが好きな作
家だよな。ちょっと興味があるかも？」という
方、「小説とかは興味ないけど青森県が好き」
という方、いろいろな方に読んで頂ける小説で
はないかと思っています。

この紹介文をきっかけに本を手にとってくれ
る方が少しでもいてくれたなら嬉しいです。



『津軽』
太宰治
新潮文庫
新潮社
913.6||D49



20歳の頃、私はどんな本を読んでいたのか。横浜で学生をしていた頃の記憶とともに、印象に残っている本の記憶を辿ってみました。

まず最初にご紹介する本は、ミタカシリーズの『ミタカくんと私』『ひょうたんから空』です。この本は主人公のナミコとその家族、そして幼なじみのミタカくんの日常生活を綴ったお話です。何気なく過ぎていく毎日を描いていますが、少しユーモラスもあり、くすくすと笑いながら、時には「えー」とツッコミながら読むことができます。学生時代、将来について考え、自分自身と向き合っていた頃にこの本を手にとりました。おそらくその時の私は、軽い読み物を探していて、この本を買ったのだと思います。しかし、私の予想に反し、この本は軽いだけの本ではありませんでした。時々、ナミコは考え事をするのです。その言葉が私の心に引っかかりました。「なんだか、すごく大事なことを言っている気がする」そう思えてならない

私は、何度もその文章を読み返し、線を引き（買った本なので）、自分なりに考えた記憶があります。将来について考えていただけに、無意識にでもアンテナを張っていたのでしょう。ナミコの言葉が私のアンテナに引っ掛かったのです。今でもこの本は線を引いたまま、大切に持っています。その頃の自分を懐かしく思い出すことができるので。

続いては、千年前の平安時代に書かれたシンデレラストーリー『おちくぼ姫』です。この本は『落窪物語』という古典の現代語版です。私は同じ著者の源氏物語を読んでいた時、この小説に出会いました。源氏物語は光源氏、そして息子である夕霧、薫の話へと続く長編小説です。登場人物も非常に多く、読む際にはなかなか頭を使います。しかし、この本は源氏物語に比べて短く、しかも話はテンポよく進むため、とても読みやすい1冊です。美しく、心優しい姫は高貴な生まれであるにもかかわらず、継母

から粗末に扱われます。しかし、そこに皆が憧れる貴公子の少将が現れ、助け出してくれるのです。まさに、シンデレラストーリーの王道をいくお話です。この本を読んだ時、なんとなく幸せな気分になったのを覚えています。どんな時代にも、どんな国にも、シンデレラストーリーはあるんですね。

最後は少し難しい読み物です。『食と栄養の文化人類学 - ヒトは何故それを食べるか - 』をご紹介します。幼い頃から食文化に興味があった私は、学生時代、論文の研究テーマに食文化に関連したものを選びました。その時読んだ本のうちの 1 冊がこの本です。科学として食物や栄養学を学び、健康教育・栄養教育に従事した筆者があえて食を文化という視点で解説しています。なぜ、人は必ずしも身体に良いとされるものを食べようとならないのか、食事の指導を守らないのか、そんな疑問に対する答えの一つとして、食習慣を形成する文化の話が書かれています。内容は 6 章から構成され、それぞれテーマがあります。まずは気になるところを読んでみてはいかがでしょうか。



『ミタカくと私』

銀色夏生
新潮文庫
新潮社
913.6||G46



『ひょうたんから空』

銀色夏生
新潮文庫
新潮社
913.6||G46



『おちくぼ姫』

田辺聖子
角川文庫
角川書店
913.6||Ta83



『食と栄養の文化人類学: ヒトは何故それを食べるか』

ポール・フィールドハウス著
和仁皓明訳
中央法規出版
383.8||F25



近代文学研究会という名のゼミに所属して
いながら、学生時代の私は映画ばかり見て
いて、それほど読書に熱心ではなかった。それ
でも、「20 歳の頃に読んでいた本」と言われて真
っ先に思い浮かぶのは、宮本輝の『避暑地の猫』
である。彼の代表作に挙げられるような大作で
はないが、私の読書の歴史の中では、記念碑の
ような存在を占める。私が「大人の読書」をス
タートさせるきっかけとなった小説なのであ
る。

小学生の頃、私は弘前市立図書館の児童書コ
ーナーの常連で、手当たりしだいに児童書を読
み漁っていた。私の言葉や表現の基盤はこの時
築かれたのだと今でも思っているのだが、どっ
ぷりと児童文学に浸かった弊害が、思いもかけ
ぬ形で思春期に姿を現した。ドリトル先生、ム
ーミン、言葉を話す動物たち…そんな世界と
あまりに長く戯れすぎたせいで、児童文学から
大人の文学への移行がスムーズにできなかつ
たのだ。子どもの本は卒業したい。かといって
大人の本の世界にひらりと飛び移れるほど、精
神は成熟してはいない。本を読みたいけれど、
何を読んでいいのかわからない、そんな空白の
時期が中学から高校にかけて長く続いた。

大学生になってしばらく経ったある日、読書
の達人である友人から「面白いよ」と手渡され
たのが、『避暑地の猫』だった。達人の薦めと
はいえ、読み始めはそれほど期待してはいなかつ
た。しかし、純粋に作品の魅力（魔力？）か



らなのか、私の「大人の読書」への準備が整っ
たからなのかはわからないが、空白の年月が嘘
のように、するりと、本当にするりと、私はそ
の本の世界に入り込んでいった。

見てはいけないものを見ている、でも見ずには
いられない、そんな感覚だった。引き返すの
なら今だ、とも思った。（どこに？）それでも、
ページをめくる手を止められなかった。読み終
わった後、若干だが、発熱したことを覚えている。

『避暑地の猫』。このタイトルに何か妖しげ
なものを感じ取ったそこのあなた。あなたの嗅
覚は正しい。避暑地、猫、霧、別荘番、地下室…。
これらをキーワードに、それらからあなたがイ
メージするものをつなぎ合わせ、できるだけ不
道徳な感じで妄想を膨らませてみてほしい。そ
して、妄想が止まらなくなった人は、実際に本
を手にとってみてほしい。おそらくあなたが妄
想したものに近い、いや、おそらくそれ以上の、
どろりとした手触りの物語が繰り広げられる
はずである。

この本との出会いをきっかけに、私は「大人
の読書」という底なし沼に、ずぶずぶと沈んで
いくことになる。そして、20 年以上経った今
も、心地よく、沈み続けている。



『避暑地の猫』

新装版
宮本輝
講談社文庫
講談社
913.6||Mi77



『東京タワー：
オカンとボクと、
時々、オトン』
リリー・フランキー
扶桑社
913.6||R47

映画化、ドラマ化、舞台化、いろいろなメディアミックスをしている「東京タワーオカンとボクと、時々、オトン」。本は読んだことがなくても何かしらで知っている人も多いだろうし、読んだこともある人もいると思います。当時の私は上京し社会人となっていたのもあると思いますが、この本を読み気付かされたことがありました。親や家族はいつまでもいるものではない、そんな当たり前のことです。読み終わって早速母親に電話をしたことを覚えています。親孝行と言えることは何も出来ていないように思いますが、母はたまに電話をかけてくれるだけで嬉しいと言っていました。些細なことでも、嬉しいと思って貰えることを少しでも

できたらそれが親孝行なのかなと今では思います。

そして今、この原稿を書くにあたり読み返してみました。すると、以前気付かなかった、というよりわからなかったことに気付くことが多くありました。夫婦のことや成人後のボクの心情…歳を重ねて気付くことがあるのだとこの本を読み返し痛感しました。また数年後に読み返した時、何かに気付かされるのかもしれないと思うと今から楽しみです。

こんな経験から、大学生という時期に読んだ本はその時の感性で読める貴重な体験だと思います。その時感じたものは絶対に自分の中に蓄積され、気付かされたり新たな考えに辿りつくのではないのでしょうか。だから、本は読んだもの勝ちです！たくさん本を読んで自分の肥やしにしませんか？勉強をするのももちろんですが、是非、図書館に本を読みに来てくださいね(^v^)…あれ？最後は図書館の宣伝になってしまいました…おかしいな；



短大時代、友人たちが皆めかしこんで成人式に出席するなか、式をボイコット？サボタージュ？して学校の図書館で読んだ一冊です。（なぜかフランス文学の棚に紛れ込んでいた一冊。今考えると完璧に配架ミスですね。ですが、ここはポジティブに！この作品と成人式の日にあえたことは司書さんの配架ミスによって導かれた運命だと思うことにします）

この作品を読んだのはそれきりなので、ボヤ一とした記憶しかありません。もしかしたら、その後に書店でこの作品を買ったのかもしれないし、買っていないのかもしれない。表紙もどんな感じだったか覚えていません。実は中身もそれほど真面目に読んでいなかったような気さえしています。そんな曖昧なものを人様に紹介するのはいかななものかとも思いますが、ここはあえてそんな作品を紹介したいと思います。

この作品はある女子大生が二十歳のころに書いた日記を編集したものです。ただそれだけ

なのです。日記なので長い章、つまりここでは日、もあれば短い日もあります。些細な喜びが切り取られている日もあれば、そうでない日もあります（なんだかサルトルの「嘔吐」を思い出しませんか？だからあえてフランス文学の棚にあったのか？…んなわけないか）。魔法学校に入学して名前を口にできない人と闘ったり、体がゴムみたいになって海賊王を目指したり、と特別面白いことが起こるわけでもありません。この作品で書かれているのは、先ほども紹介したとおり「ある女子大生の日常」のみです。勉強をして、読書をして、アルバイトをして、恋をして、恋に破れて（ここでボーヴォワールの「第二の性」がでてきちゃったりします。うちの図書館にも入っていますよ。私のお勧めは「娘時代」のほうですが、これはありません。残念!!）、といったかんじです。日記ですから。

「少女」と「大人の女性」の間の年頃にしか共感できないであろう「体中を支配する言語化できないドロドロとした出口の見えない感情」

がこの作品には溢れていた気がします。みなさんはこのような感情にとりつかれたことはありませんか？私は当時この感情をうまく表現することができなかつたのですが、作者は「未熟さ」と「孤独感」という表現を使いこの日記にその感情を綴っています。が、この稚拙な作品紹介を読んで「私にもわかる、このかんじ…」と思ってくれた心優しいそのあなた！残念ながらその出口はこの作品には書かれていません。これは、その感情に飲み込まれてしまった、もしくは時代にそうさせられてしまった人の日記です。ですから、その感情の行く末、出口はみなさんがご自身で見つけてください。ちなみに私は「鈍感になること」と「大人になること」は同義語じゃないのか？と思い始めた瞬間に出口が見えてきました。そんな日々から早 ン年。学生のみなさん、大人も案外楽しいものですよ。たぶん。

…話が脱線しました。まあ、とにかく、開いてすぐの二行を読んでください。たしか最初に記してあったはずですが。当時の私はこの二行に衝撃を受けました。この二行がわたしにとってはこの作品の全てでした。いつの世も二十歳ってこうなのか、となんだか泣きたい気持ちになり、そして少し安堵したことを覚えています。

最後に余談。この作品、「二十歳の原点」は詩で締めくくられています。「ランボーを彷彿とさせるような詩」といったような表現のあとがきがあったので、読了後「地獄の季節」を借りて帰りました。私には二人の詩に共通性をまったく見つけられませんでした。そして「やっぱり二十歳といえばポール・ニザンでしょ！」



『二十歳の原点』
高野悦子
新潮文庫
新潮社
915.6||Ta47

と、ランボーはすぐに返却。なぜ二十歳といえ
ばポール・ニザンなのか、気になる方は「ポー
ル・ニザン 二十歳」でググってみてください。
おそらく何かヒットするはずですが。この冒頭も
なかなか強烈ですよ。





名数というものをご存知でしょうか。日本三大夜景とか、六歌仙とか、竹林の七賢といった、あれです。では、名数とは時代や選者などに左右され、意外に流動的なものだということもご存知でしょうか。例えば、世界七不思議として有名なものは古代に選ばれたものですが、当時の「世界」とは地中海沿岸だったことがわかるようなラインナップとなっています。

さて、ご紹介する本の一冊目『匣の中の失楽』は、日本推理小説四大奇書のひとつといわれています。読むほどに迷い込む、推理小説マニアによる推理小説マニアのための推理小説です。二十歳の頃の私は、そんなことは知らずに友人から借りて、寝る前に少しだけ……のつもりが結局徹夜で一気に読みました。第一発見者を待ち伏せしていた人物の謎が不気味で、学生寮の共同トイレに行くのがちょっと怖くなった記憶があります。ちなみに、この小説が書かれるまでは『ドグラマグラ』『黒死館殺人事件』『虚無への供物』が三大奇書でした。今でも『匣の中の失楽』を加えずに三大奇書のままとする説もあります。中国四大奇書も三大奇書とすることがあるようですから、あえて議論する余地を作って楽しんでいるのかもしれませんが。

もう一冊の『風土』は、気候などの環境的要因から文化や国民性を説明した本です。中学・高校で地理が好きだった方は、きっと楽しめると思います。批判されている部分があることは文庫判解説からもわかりますが、納得できるところもあります。現在の感覚でとらえて違和感がある部分については、反論を考えてみるとおもしろいかもしれません。

この二冊の本は、読んだことを鵜呑みにはできない本です。本に書かれたことが絶対正しいとは限りません。読みながら疑うことを楽しんでください。



『匣の中の失楽』

竹本健治

講談社ノベルズ

講談社

913.6||Ta63



『風土』改版

和辻哲郎

岩波文庫

岩波書店

121.65||W48

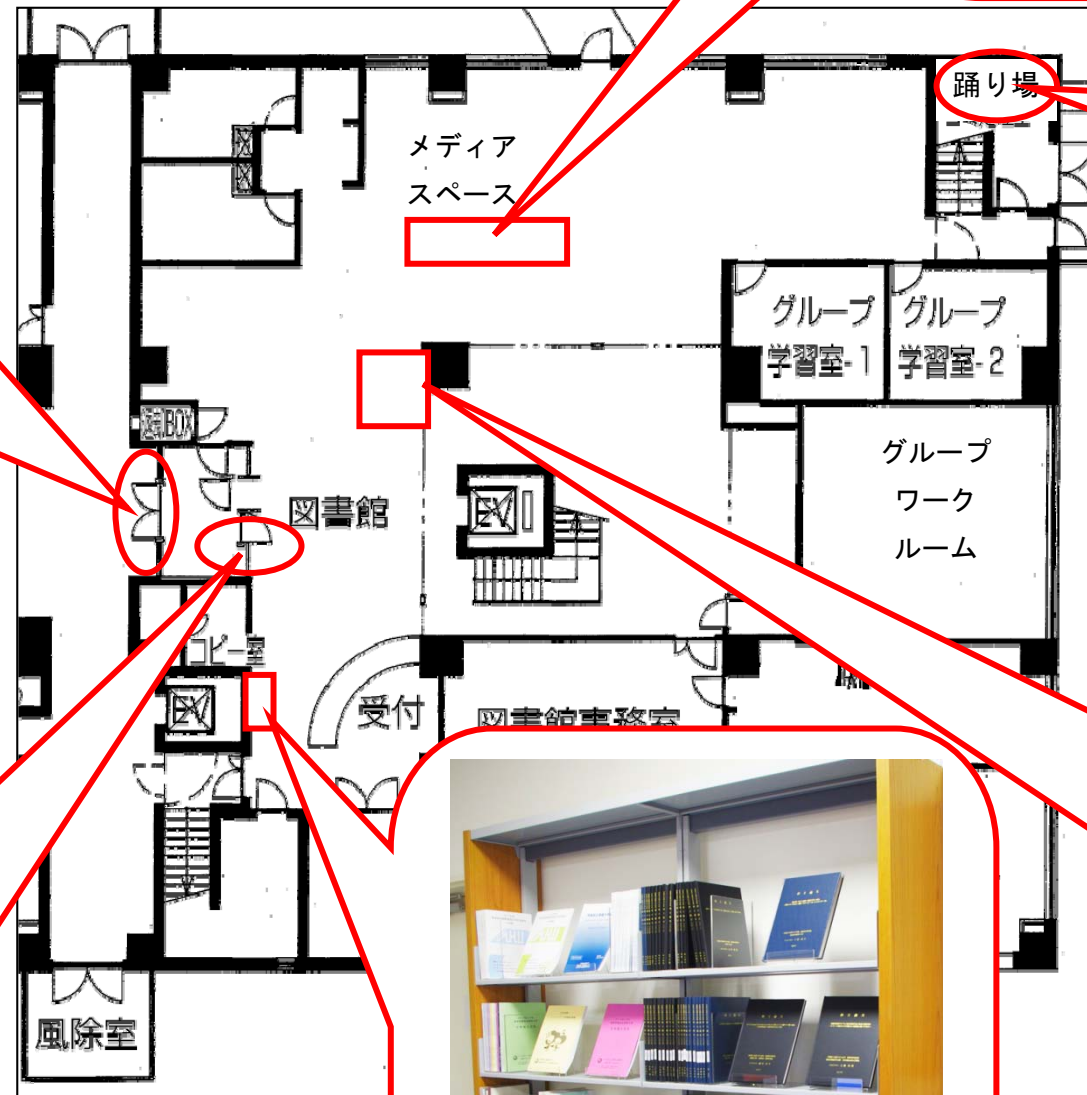
図書館のココが変わった！

正面出入口 * 自動ドアになりました



指定図書コーナー

* カウンター前から
メディアスペース手前へ
移動しました



非常用ボタン

* 踊り場、エレベーター横、
トイレなど館内14箇所に
あります
図書館カウンターと
防災センターに通報されます



新聞コーナー（当日分）

* 2階から1階エレベーター前へ
移動しました
ソファを貼り替えました



入館ゲート

* 一人ずつ学生証をかざしてお通りください



博士・修士論文コーナー

* 新設しました



図書館広報キャラクター「トリゾウ」

2011年3月、社会福祉学科成田悠介さん・福士悠輔さん・牧野祥諒さんのアイデアをもとに誕生。図書館の広報活動で活躍しています。



青森県立保健大学附属図書館だより ラポール 第20号

平成25年4月 発行

発行者 青森県立保健大学附属図書館

〒030-8505 青森県青森市大字浜館字間瀬 58-1

電話 017-765-2011

URL <http://www.auhw.ac.jp/library/index.html>